

サーキット・ライダー 2003年 4月号

赦しと復活

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているか知らないのです。」

ルカ 23：34.

とうとう戦争が始まりました。連日の空爆、地上戦で多くのイラクの市民、女性、子供が恐怖に震え、傷つく一方、まだ何も分からない18、19、20歳という若いアメリカ兵が戦闘に送られていく。私の父母の世代は若い頃にこんな光景を何度となく見ています。また人類の5000年弱の歴史の中でもこのような光景は絶えず繰り返されてきました。「先日、第二次大戦で散った渡邊綱吉さんのことをホーム・ページ、牧師の部屋、雑記帳で紹介しました。よろしかったら umc-japan.org を開けてお読み下さい。今、とても他のメッセージを語れません。今回は「きけ、わだつみのこえ」から引用させていただきます。「わだつみと」には1. 万葉集などで歌われている海をつかさどる神。2. 海（そのもの）の意味があります。遠く海を越えて戦地に赴きその命を散らせてしまった学生達の手紙、歌などを集めた本ですが、海の彼方ということからわだつみ＝海の声としたようです。

娑婆より最後の訪れを書こうとしてペンを執ったが、千万言胸に溢れて書くべき言葉を知らない。君の手紙や電報は四日、香椎に帰ってから見た。二十八日の夜香椎駅の夕闇をすかして、私を探した君の姿を思い浮かべてまことにすまないと思う。

君はメイの浜や新宮の浜のような美しい砂浜に、どこまでも続いている足跡を見たことがあるだろう。藤村か誰かの詩にそんな光景を歌ったのがあったように思う。私はそこに交わり合った数条の足跡がわれわれであったように思う。どこに始まってどこに別れるかも知れない。そこはかたなく悲しいものは砂浜の足跡である。

波に消される痕であっても、足跡の主の力づよい一足一足が覗かれる。もり上がった砂あとに立ち去った人の逞しい歩みを知る時、私はちからづけられる。まことにわれわれは過去を知らず、未来を知らない。しかし現在に厳然と立つ時、脚にこもる力を知る。加藤からの便りにも、「永遠に歩かねばならぬ、永遠に歩き続けねばなりません。」とあった。

中尾武徳 東大法学部学生。沖縄南西海上にて戦死。二十二歳。

わが妹は母しなければとつぐ今日誰が帯結び粧いするらん 沖縄に向かう途次、妹に贈れる歌

松本光憲 上智大学在学中に入営。沖縄本島にて戦死。二十五歳。

あすいゆくわれのほころびをつくろわんとたらちねの母はあかりをつけぬ 出征前夜

榊原大三 東大医学部卒。軍医として出征。ペリリウ島にて戦死。二十八歳。

くらき海くらき眼をもて見つめつつただひたすらに合掌するも 戦地より

木村 節 日大美術科卒。レイテ島カンギポフト山にて戦死。二十二歳。

これらは召集され貴い命を失った多くの学生のごく僅かな人達の遺作です。どれほど多くの命が花開く前に散って行ったことでしょう。彼らの親に対する思い、恋人、妻への思いが「きけ、わだつみのこえ」から切々と伝わってきます。「お国の為、天皇の為」と美名、大義名分を押し付けられて死んでいった人たち、今また、同じことが繰り返されています。イラクでの戦争は聖戦でもなければキリスト教とイスラム教といった宗教戦争でもありません。独裁者と独裁者のエゴから起こされているにすぎない。本当に世界が破滅する前に、全人類は悔い改めなければならない、、そんなことを思いながら苦難節を過ごしています。今は復活祭を心から迎えたい、そればかり願っています。

「主よ、愚かな人間をお赦し下さい。」

吉松 純